

時代の風 西水美恵子 世界銀行 元副総裁

高等学校で話をする機会が年々増え、生徒のインシニアで招かれることも結構あり、うれしい。世界銀行での体験を書いた拙著や本欄などが教材に使われるようになったからだ。読者を社会人と想定したものは、かなりなので、日本の教育程度の高さに感心している。いい教育を授けてくれた母国へのお礼のつもりで、全国各地へ行くのも喜んで出向いているが、お礼どころか逆に生徒から宝物のような時間をもらうのが常。真剣な目、深く聴き入る姿勢、問題の核心をつく質問。真っ正直な返答。タンタジとなりながらも、近い将来、国づくりを担うのはこの子たちなのだと感じ、背筋が伸びる。

日本で広がる格差

をばせていた。親から子へ、そのまた子へと、何世代も続く貧困という名の足かせを引きずるがゆえに、いい教育を受ける機会を逃した子たちだ。

腐った政治がはびこる国や、宗教、人種、カースト差別などが極端の背景にある所では、行きたい学校に行けない少年少女の目を見ることが恐ろしかった。夢や

公平で質の高い教育を

希望の光を借すべきところに、積みも積もった鬱憤の火種がおこっていた。

やりほがない若者の怒りは怖い。命他に捨てるものがない貧しい若者の怒りは、なおさら怖い。先月の本欄でホームステイの体験に触れたパキスタンの農村では、多くの若者がテロ活



二竹内紀臣撮影

動にはじった。兄弟と慈しんだ青年たちも、もうこの世にいない。

貧困の世代連鎖を断ち切る術であるはずの教育が、往々にしてその役割を果たさなくなっているのは、途上国に限らない。特に、先進国の中で最悪の貧困率を占める米国に、この傾向が目立つ。

英国の経済誌エコノミスト(1月24・30日号)が、「America's new aristocracy(アメリカの新貴族階級)」と題した論説で、エリート層の世襲化とも言える現実を痛烈に批判していた。成功は生まれではなく能力と努力しただけというアメリカンドリームが、神話になりつつあると。

エリート層の子供が、その他大勢の子たちよりも「親の社会的地位を相続するに値する実力」を持つようになったのだ。親は自分の価値観を子に奨励するから、親の学歴が財力と共に子の学力向上に影響を与える。この傾向は、米国では相違言から知られていた。それを緩和するはずの教育制度が、逆に強めるようになってしまった。

「純粋に成績だけで入学審査をする大学はカリフォルニア工科大学くらい」というから驚く。

高校と呼ばれるようになって数年。今は、「ここにいない子」のイメージが、日本の貧しい子供に変わっている。

昨年公表の「国民生活基礎調査」によると、子供の貧困率が過去最悪となった。わが国の相対的貧困層(手取りで月収約10万円未満)の世帯に、17歳以下の子供の6人に1人(16・3%)が暮らしているのだ。

最近の研究では、日本も米国と同様、子供の学力が社会経済的な家庭状況に比例する傾向にあると指摘されている。このままでは、「6人に1人」の子供が天性の能力を伸ばし、自分の可能性を思う存分発揮する未来を築く見込みは、他の5人より低くなるだろう。

多大な才能が無駄になれば、経済成長に歯止めがかかるのは言うまでもない。経済と社会の格差をせばめる政策そのものが、息の長い成長につながる。先進国でも途上国でも、そのためにかかせないのが、公平かつ質の高い教育である。エコノミストの論説は、とりわけて政治への影響に警報を鳴らす。次の米大統領選は、元大統領夫人(民主党)と、元大統領の息子(共和党)との世襲争いになる可能性がある。「もしも国民が政治のゲームはいかさまかと疑うようになれば、右翼か左翼の扇動政治家に投票する気になるかもわからない」と。

わが国の投票率が低迷するなか、若年層の投票率が異常に低い。不気味だ。